

文部科学省 情報ひろば 『サイエンスカフェ』

「サイエンスとの〈対話〉は可能か？—3.11 以後の社会を考える」

主 催：日本学術会議、文部科学省

日 時：平成24年9月28日（金） 19：00～20：30

場 所：文部科学省情報ひろばラウンジ（旧庁舎1階）

講 師：五十嵐 沙千子（筑波大学人文社会系准教授）

ファシリテータ：渡辺 政隆（日本学術会議連携会員、筑波大学広報室教授・サイエンスコミュニケーター）

報告：石川 菜央（日本科学未来館・科学コミュニケーター）

講師である五十嵐先生のご専門は、哲学。サイエンスカフェのルーツは、フランスで始まった哲学カフェである。本日のサイエンスカフェは、哲学カフェという形で、科学について語り合う場となった。講師とファシリテーターとのやりとりを、参加者が質問や意見を挟みながら聞く講演会形式を想像していたが、会場では、椅子が円形に並べられ、講師もファシリテーターも参加者と一緒にその輪の中に入っていた。ファシリテーターとは、議論の進行役のことで、司会や座長というよりも、参加者同士の意見のやりとりを促し、議論されている内容について参加者がより深く考えることをサポートする役割である。そして、参加者同士で活発な意見交換がされた。



哲学カフェでは、まず、参加者全員に声を出してもらおうという。そこで、約30人の参加者が一人ずつ自己紹介を兼ねて、呼んでもらいたいニックネームと今回のサイエンスカフェで受け取りたいことを順番に話した。科学者や研究者だけではなく、「定年後のボケ防止のために来ました」という初老の男性、「卒論で研究している内容を家族や友人などにうまく説明できない」と悩みを語る理系女子学生、「科学者は科学は万能ではないと知っているが、科学者ではない人は、科学で分からないことはないと思っている」と語る40代の男性、「科学は身近ではない」と語る30代女性、気功を生業にしている40代の中国人女性など、様々なバックグラウンドを持つ人々が参加されていた。

自己紹介後の30分は、具体的なテーマは特に決めず、参加者が科学に関して思うことを述

べ合った。その後、グループに分かれて 20 分をかけて自由にディスカッション、最後の 10 分は各グループで話し合ったことをグループの代表者が発表した。



グループごとの発表内容は以下の通りである。

- 「科学とは何か」ということを話し合った。東洋の科学は全体を見る科学で、西洋の科学は細分化の方向に向かっている。
- 「科学とは何か」ということを、こうしたサイエンスカフェだけではなく、私たち市民一人一人が考えなければならない。
- 科学と一般の人々の間に壁があるというのはよく言われることだが、市民同士ですら価値観の違う人たちと話をしないことが当たり前になっている。まずは市民同士の対話を進めていくことが重要である。
- 東日本大震災の後、今まで意識していなかっただけで、日常生活や社会の中に様々な危険があったことに気づいた。何が危険かを知っておくことは大切だが、私たちは全てを知ることにはできない。危険とそうでないものをかぎわける能力が必要。
- 一つの事柄に対して、科学だけで答えを出すことはできない。
- 科学者は、自分が知っていることはほんの一部で、自分がいかに知らないかということを知っている。「地震が起きるかもしれない」と言った時、それは「起きるかもしれない」という可能性を言っているだけであって、起きるとも起きないとも断言できない。アリバイと同じで（「いる」ということは証明できても「いない」ということを証明できない）、分かっていることは証明できても、「これが分からない」ということは証明できない。

ファシリテーターの渡辺先生から、次のような意見があった。

- 今日の議論で出ていた、「科学なら何でも解決できるはず、と信じている市民がいる」という指摘について考えた。「科学は万能ではない」ことを科学者は知っている。問題は、科学者が「市民も自分と同じように考えているはず。」と思い込んでいることである。
- では、科学は 100%正しくない、ということを経験者が言うべきなのか。科学者か、マスコミか、科学コミュニケーターか。たぶん、誰かが言えばみんなそれを信じる、というわけではない。
- また、ある情報や物事の決定に関して、誰かがそれを信じたくない、嫌だと言った時に、そ

れが何人になれば認められる、あるいは認められないのかは一概に決められない。

- 結局のところ、様々な情報をどの程度信頼し、どの程度利用するのかは、それぞれの人が当事者意識を持って決断する以外にはないのではないだろうか。

最後に、講師の五十嵐先生から、お話があった。

- 哲学には正解はない。哲学の成果は正解ではなく「より良い問い」。自分は哲学者なので、誰かから「人間ってどう生きればいいのか」と尋ねられて「えっ？」と言うと、「哲学者のくせに分からないの？」と言われることがある。自分は、分からないから研究をしている。
- 私たちは、自分が寒いとかお腹がすいたとか感じることはできるけれど、原則として自分のことしか感じられない。科学というのは、他人の状態を推し量ったり、他人についての説明をしたり、社会とつながりを持つための道具になり得るのではないか。